

儒学者井上佐兵衛正臣について

—平野郷・含翠堂・懷徳堂との関わりを中心に—

井上 治

はじめに

享保九年（一七二四）、大坂の豪商達によって船場尼崎町に懷徳堂が創設された。富永仲基や山片蟠桃ら江戸時代を代表する町人学者を輩出した事で知られる漢学塾であり、その学問的系譜は後世の大阪大学にまで連なる。この懷徳堂の創設に先立つ享保二年、摂津国住吉郡平野郷（現大阪市平野区）に創立されたのが含翠堂である。含翠堂は平野郷の有力者によって創立された郷学であり、懷徳堂のモデルとなった事でも知られる。

井上佐兵衛正臣はその創立グループの一人であった⁽¹⁾。含翠堂は井上邸の一部を間借りする形で運営されており、正臣は含翠堂での講義も担当していた。また、『名家伝記資料集成』に、「井上正臣、称佐兵衛、左平、号赤水、浪華学問所懷徳堂開講及含翠堂興立に関係す」とあるように⁽²⁾、正臣は懷徳堂の創設にも関わっている。享保十一年（一七二六）に懷徳堂が官許を受けて大坂学問所としての活動を始めると、正臣は大坂に移住して並河誠所や五井蘭洲とともに初期懷徳堂の講師を務めた。

懷徳堂やその関係者については多くの研究があり、また含翠堂あるいは平野郷に関しても幾つかの研究がある一方で⁽³⁾、含翠堂および懷徳堂の草創期において重要な役割を果たした正臣に関しては、「井上正臣の功勞は忘れられている」と評されるように⁽⁴⁾、史料の不足もあり全くと言って良い程論じられる事が無かった。しかし、懷徳堂と含翠堂との関係、あるいは当時の平野郷の有力者の立場を考察する上で無視できない人物である。本稿では享保年間（一七二六～三六）を中心とする平野郷の社会状況を踏まえつつ、諸史料に断片的に言及されるに止まっている井上佐兵衛正臣の全体像について、平野郷、含翠堂、そして大坂の懷徳堂との関わりを中心に整理する。

一、近世平野郷における含翠堂創立の土壌

(一) 平野郷と七名家

平野郷は大坂の二里南東、堺の三里北東に位置しており、嘗ては「則御城郭二而、四方構二重堀二重土手を築廻シ、惣門十三口有之」と表現される環濠都市であった⁽⁵⁾。「平野」は「広野」の転訛とするのが通説であるが、この「広野」とは坂上広野磨に依る。後漢靈帝の曾孫、阿智使主の末裔を称した渡来系氏族坂上氏からは延暦十六年（七九七）に征夷大將軍となった坂上田村麿が出たが、その次子が広野磨である。伏見宮邦永親王らの筆に成る「平野郷社縁起（近衛家熙外題）」によると、広野磨は嵯峨天皇より杭全庄を賜った。広野磨の子孫である坂上家は、京都の公家と血縁関係を保ちつつ、代々「民部」を称してこの地に定住する事になる⁽⁶⁾。「平野磨」とも呼ばれた坂上家は平野郷の象徴的存在であり、広野磨の子当道によって創建され郷の中心となった平野郷社（現杭神社）の神事も司った⁽⁷⁾。

その後、藤原氏の手に渡った同郷は、藤原頼通によって永承年間（一〇四六～五三）に宇治平等院に寄進されてから天正年間（一五七三～九三）までその荘園であったが、「坂上之筋目有之候者共」が治める「守護不入之地二而御座候」とあるように、一定の独立を保っていた⁽⁸⁾。戦国期には三好長慶や松永久秀、織田信長の支配を受けたが、この乱世においても久秀や信長に代官の罷免を要求する連判状を出すなど強固な自治意識は存続していた⁽⁹⁾。

秀吉の時代になるとその正室高台院領とされるが、この時も「ひら野の事、としよりともにまかせ、たいくはん入すに申付られ候」とあるように⁽¹⁰⁾、代官を介さずに在地の「年寄」が行政を担った。高台院の没後は、幕領、川越藩領、高崎藩領を経て、含翠堂創立時には下総古河藩領となっていた。

以上のような政治変動の中、平野郷では一貫して経済活動が盛んであった。天正十二年（一五八四）のイエズス会『日本年報』は、「堺の向ふ一レグワ半の所に甚だよい町がある。悉く竹をもって囲まれ、城の如くなつてゐて、平野 Eriano と称する。……甚だ富んだ人達の村である」と報告している⁽¹¹⁾。この頃の平野郷で活躍したのが末吉家であった。天正十一年に末吉藤右衛門行増が死去した後、長男藤左衛門増久の東末吉家および次男勘兵衛利方の西末吉家は、秀吉あるいは大和の筒井順慶、越後の上杉景勝、出羽の最上義光等から領内往還の保障や商業特権を得るとともに、伏見や京都、江戸銀座の頭役座人に名を連ね

た⁽¹²⁾。さらに利方を継いだ孫左衛門吉安(吉康)は呂宋や暹羅方面に朱印船交易を展開し莫大な富を築いた。後に西末吉の孫左衛門家は代官を四代務めた後に旗本となり江戸に出たが、その分家である五郎兵衛家、および末吉自家の東末吉家は平野郷に残る事になる。

前述の通り平野郷は古くから自治意識の強い地域であったが、その自治の象徴であったのが同地に定住した広野磨の直系である坂上民部家(平野殿)であった。そして実際の行政と祭祀を担ったのは、その坂上家の傍系である七名家(平野七家)と呼ばれる一族であった。末吉家はその筆頭格であり、道頓堀採掘に尽力し大坂の陣で戦死した成安道頓が出た成安家もその一つである。近世の平野郷は、この七名家から出る「惣年寄」によって治められた⁽¹³⁾。『平野郷町誌』によると、「七名家は野堂・則光・成安・利則・利國・安國・安宗で、改姓して野堂は末吉、則光は井上、利則は三上、利國は土橋、安國は辻葩、安宗は西村と改めた」とされる(成安は改姓せず)⁽¹⁴⁾。

含翠堂に話を戻すと、享保十五年(一七三〇)、土橋宗信によって記された「含翠堂記」の末尾に「含翠堂興立生員」という項目があり、そこには「土橋七郎兵衛友直、土橋九郎右衛門宗信、成安源右衛門榮信、徳田四郎左衛門宗雪、井上佐兵衛正臣、間元之進宗好」の六名が挙げられている。この六名が含翠堂の創立者である。「土橋・成安・井上は七名家出身であり、徳田は土橋の親族、間は末吉の親族」であるので⁽¹⁵⁾、含翠堂は七名家とその親族によって創立された事になる⁽¹⁶⁾。

(二) 享保期の平野郷

近世前期における平野郷の社会経済状況を見ると、まず秀吉による大坂への移住命令(大坂平野町の形成)、さらには大坂の陣における戦火で大きな被害を受けた⁽¹⁷⁾。その後再び繁栄を始めるが、近世前期の平野郷の経済を語る上で欠かせないのが、寛永十三年(一六三六)に開通した柏原船である。これは元和六年(一六三〇)と寛永十年の二度にわたる大和川の氾濫で大きな被害を受けた河内国柏原村の復興資金調達のために代官末吉孫左衛門長方が計画した、柏原から平野郷を経て大坂天満(京橋)に至る平野川を航行する荷船である。当初の船数は四〇艘、寛永十七年には七〇艘での運用となり、平野郷にも大きな収益をもたらした⁽¹⁸⁾。また平野郷の復興では末吉家の菩提寺である光源寺の再興も課題と

されたが⁽¹⁹⁾、この頃に同寺の娘(定子)が梅小路定矩の養女となった後に後西天皇に嫁ぎ、八条宮尚仁親王、公弁法親王(一九〇世天台座主)、良応法親王(一九二世天台座主)を生んでいる。元禄十五年(一七〇二)には大坂町奉行所の通達によって、本郷七町(野堂町、泥堂町、市町、流町、西脇町、馬場町、背戸口町)と散郷四村(今在家村、新在家村、今林村、中野村)を合わせて「平野郷町」と呼ぶようになった。延宝七年(一六七九)の検地では、本郷散郷を合わせて約五六一九石の石高であった。平野郷の町政記録である『覚書』等から人口を調査した津田秀夫によると、平野郷の人口が最も多かったのは十八世紀前半であり、宝永三年(一七〇六)から享保十七年(一七三二)には一万人を超えている。その後は通減し、寛政元年(一七八九)には七三三三人となる。従って、含翠堂が創立された享保二年(一七一七)は平野郷の最盛期であったとも言えるが、その後の人口減少は当時既に衰退の兆候が見えつつあった事も意味している。文化十三年(一八二六)に記された「口上書」では、平野郷衰退の要因として、大和川の付け替えと綿産業の低迷を挙げている⁽²⁰⁾。

江戸時代前期、土砂の堆積によって天井川となり度々水害をもたらしていた大和川の付け替えは不可避となっていた。幕府は元禄十六年(一七〇三)に工事を決定し、翌宝永元年には付け替えが完了した。平野郷の東方を北上し大坂城東で淀川に合流していた旧大和川(久宝寺川、玉櫛川)は、平野郷の南方をほぼ真西に流れて堺の北で大坂湾に注ぐ川筋となった。この付け替えによって平野川へ流れる水量が減少し、郷内の水源確保や柏原船の航行に悪影響をもたらした。平野郷の産業について見ると、宝暦十三年(一七六三)の「平野郷町地図」には、同郷の特産品として「醍醐の花見」でも用いられた平野酒、あるいは平野薬、平野飴などが記載されている。しかし何より、現在でも平野区の「区の花」がワタであるように、近世平野郷における代表的産業は綿業であった。宝永三年(一七〇六)には郷内の田地の五一%、畑地の八一%が綿作に充てられていた⁽²¹⁾。また郷内での栽培だけでなく、綿産地である河内や大和の村々で収穫された綿を買い集め、織維となる「練綿」と油を搾る「綿実(種)」に分ける「綿繰り」も盛んであり、宝永二年には一六六軒の練屋が存在した。保温に優れた木綿は室町時代後期から一般にも用いられるようになったが、需要の多い東北地方では寒冷な気候から栽培が困難であった。井筒屋清右衛門、車屋九右衛門、竹屋次郎兵衛ら平野郷商人の練綿は江戸に出荷された後、川舟や陸路で奥州各地

にまで行き渡った。しかし、元禄から享保に至る時期に「湿り綿」等の品質低下問題が由来し、取引に支障をきたす事になる。品質維持を図る為、元禄十二年（一六九九）に「見分会所」を設立したものの、旧大和川河床を利用した綿作地の増加や大坂の綿産業の発展による平野郷の優位性の低下もあり、寛保三年（一七四三）に平野郷町惣年寄から大坂町奉行所へ出された連署状には、「近年ニ至り綿売買、以て之のほか、衰微仕」とある⁽²⁾。

このように含翠堂が設立された享保期は、大和川の付け替えや綿産業での問題表出という不安要素が既に見え始めていた。さらに七名家の立場から見ると、十七世紀前半以降の綿産業の発展自体が⁽²³⁾、新興商人の出現による新たな秩序の形成と階層分化、換言すると七名家の伝統的権威の危機をもたらすものであった。このような時代背景から、宝永二年（一七〇五）以降、七名家は相互扶助および七名家以外との婚姻や養子縁組を制限する事を定めた「長寶寺観音講（二十三日講）」を結ぶ⁽²⁴⁾。また享保四年（一七一九）以降は平野郷社における神事に関連して洛東吉田神社から許状を受けているが⁽²⁵⁾、これも七名家の権威を再確認する試みであった。含翠堂は、このような平野郷、特に七名家層の危機意識が高まっている中で創立された。

二、含翠堂の井上佐兵衛正臣

（一）含翠堂の創立と運営

含翠堂の前提として、前章で見た社会状況の変化と並んでもう一つ挙げなければならぬのは、元禄から享保における学問（儒学）の隆盛である。この頃の儒学は反商業的性格も薄らぐ傾向にあり、武家を越えて町人層にも普及するようになる。大坂でも、専ら四書（『論語』『孟子』『大学』『中庸』）を講じて「四書屋加助」と呼ばれた五井持軒（加助）によって十七世紀後半から儒学が広まった。

平野郷では、元禄末年頃から三上如幽らによって儒学の講習会が開かれた。しかし郷内では儒学に批判的な一向宗が多かった事もあり、この試みは中断する。この三上如幽の娘婿が、含翠堂の発起人である土橋友直であった。友直は和泉国貝塚の三宅孫左衛門友政を父として貞享三年（一六八六）に生まれ、七名家の三上如幽の娘豊と結婚、さらにその後夫婦養子として同じく七名家で合業を家業としていた土橋家に入ってからその当主となった。その後、三年ほど京都に遊学し、医学を後藤良山に、和歌を河瀬菅雄に、そして儒学を堀川古義堂の伊藤

仁齋に学んでいる。

友直は平野郷へ帰郷後、享保二年（一七一七）五月五日に含翠堂を創立する。含翠堂の講舎が定まる経緯に関しては、前述の土橋宗信「含翠堂記」に詳しい。即ち同志が相談していたところ、「それか中に井上佐兵衛正臣すゝみ出ていへらく予か家むなしく広し。いさ此半をさきて今より講舎とせむ。幸にわれいとまの身となれり。舎を守りて朝夕の清めをもしてん。会集の日の茶爐燈火のそなへも諸友の手を煩ハさし、と。こゝにおみて諸友よろこひいさみ、享保第二丁西のとし五月五日、はしめてこの家に会して友直、正臣など講習をなせり」とあるように⁽²⁶⁾、正臣が自身の邸宅の一部を含翠堂に提供した。後述のように当時の井上邸はかなり大きかったようなので、部屋の余裕もあったのであろう。

井上正臣と土橋友直の関係に関しては、『含翠堂考』に「親戚関係にあり」と記されている⁽²⁷⁾。「土橋氏家譜並系図」によると、十七世紀中頃に惣年寄を務めた土橋五郎左衛門一友（正雲）が井上佐兵衛了祐の娘を娶り一女を産んだとある⁽²⁸⁾。了祐と正臣の関係は不明だが、同じ井上（佐兵衛）家であると考えられる。『含翠堂考』に言う「親戚関係」がこの「土橋一友—井上了祐女」の事を言っているのか、あるいはより近い姻戚関係があったのかは定かでない。一方、正臣はその著書の中で自身の出身を「大和河陽沙界」、即ち大和川南の堺であると記している⁽²⁹⁾。平野郷と堺の交流は、永禄十一年（一五六八）の織田信長の畿内進出に際して堺から共同防衛の申し入れがあり翌年には堺の女性と子供が平野郷に避難した事、あるいは天正七年（一五七九）に末吉家が堺の馬座の権利「陸運権益」を得ている事からも分かるように、政治経済文化活動を通じて盛んであった為、彼が堺から出て平野郷に在住している事は不自然ではない。しかし既に土橋家と婚姻関係を結んでいた井上（佐兵衛）家が存在し、さらに「末吉家系図」に拠ると、宝永五年（一七〇八）から正徳三年（一七一三）に惣年寄を務めた末吉家の治兵衛宗勝の妻は「井上佐兵衛女（妙吟）」である⁽³⁰⁾。世代的にはこの「井上佐兵衛」は了祐の次代、正臣の先代あたりと考えられるが、いずれにせよこのような事から正臣以前に平野郷の有力な家として井上（佐兵衛）家があった事が分かる⁽³¹⁾。従って、あるいは貝塚出身の友直と同じく、正臣もまた堺から平野郷の旧家に養子に入った可能性も考えられる。

含翠堂には前述のように創立者グループとも言える「興立生員」があるが、別に「助力生員」という支援者グループもあった。ここには、末吉平次郎増篤や

辻葩新五兵衛宗孝ら七名家筋、井筒屋清右衛門、あるいは富永仲基の父である大坂の道明寺屋吉左衛門（富永芳春）ら豪商が名を連ねている。江戸の陽明学者である三輪執斎（希賢）⁽³¹⁾の名前も見られる。「執斎三輪氏は、和歌の同門にしてよしみも深かりければ、ことさらに相親しみて其堤擲（指導）⁽³²⁾をうけよるより、わきて陽明王子（王陽明）の教をぞ尊信しける」と言うように、友直はともに河瀬菅雄に和歌を学んでいた執斎の陽明学の影響を強く受けていた⁽³²⁾。正臣も友直を通じて執斎と知り合ったようで、含翠堂創立前年の享保元年（一七二六）七月の執斎の江戸下向に際しては、正臣、友直および成安休弘の三名が京都まで同道した上で漢詩や和歌を送っており、「送別の辞」を正臣が記している⁽³³⁾。

先述のように含翠堂の講舎は正臣の屋敷の一部を用いていたが、三輪執斎が記した「原野〔平野〕学問所之事」は、この提供に関して経済的な事情があった事を示唆している。そこには「享保二酉年、同志井上佐兵衛不勝手に罷成、身軀（身代）を仕舞申候」とあり、正臣の家業が上手く行っていなかった事が分かる。さらに、「家居は郷中にて二三番の住居にて候を、其身ひつそく〔逼塞〕仕候へば、大家は入用も無之候。幸講習の寄合所に差出し可申候とて、朋友の中へかし申候」とある。正臣が述べていた「予か家むなく広し」というのは、必ずしも謙遜ではなかったたのである。「いとまの身」となっていた正臣にとって、含翠堂への貸与は屋敷の有効利用、即ち家賃収入を得るという目論みもあったと思われる。実際、含翠堂創立当年の享保二年（一七二七）の収支を「含翠堂手簿」に見ると、正臣を含む「興立生員」の六名が運用の為の掛銀五〇目（匁）を出しており、その合銀三〇〇目から一二〇目を「講舎屋賃」として正臣に払っている⁽³⁴⁾。その後も毎年「講舎屋賃」の支払いが続いた後、享保十一年には「式貫三百匁、井上左平へ渡、右ハ含翠堂座敷並借家一軒供部屋共畳戸立具飛石庭揃共買取候代銀拂」、即ち二貫三〇〇匁で講舎部分を買収したとある（土地はそのまま借用）。その後の「年貢（地代）」は、享保十三年から井上助太郎宛となっている。河内国高安の神光寺には土橋友直ほか含翠堂および懷徳堂関係者の墓が多くあり、井上正臣夫妻の墓もある。妻は伊予松山出身の順静という女性で、その墓石には「井上左平妻助太郎母」と刻まれている。従って、この助太郎は正臣の息子であると考えられる⁽³⁵⁾。その後も、元文二年（一七三七）からは井上佐一郎、同三年からは井上伊八郎、寛保元年（一七四一）からは井上東蔵、宝暦二年（一七五二）からは井上三五郎へと、代々井上家に地代が支払われ、明和四年

（一七六七）以降は井筒屋太右衛門宛に支払われている。

井上邸（含翠堂）は平野郷の市町（河骨池筋西、猿屋小路南、市門筋北）にあった。末吉一族あるいは全国規模で活動する豪商が居並ぶ平野郷において「郷中にて二三番の住居」と評される以上、かつては相当の財力があつたと思われるが、正臣の家業、そして「逼塞」に至った原因については詳らかでない。享保八年（一七三三）九月、天王寺屋五兵衛（天五）と並んで当時の大坂を代表する両替商であった平野屋五兵衛（平五）が正臣の斡旋で含翠堂に寄付をしているので、何らかの取引があつたのかもしれない⁽³⁶⁾。元禄八年（一六九五）以降、平野郷出身の連歌師等怡の忌日である六月十八日に毎年巻かれた連歌会の記録『等怡懷旧連歌三物写』の「連中具名」に拠ると、「正臣」の箇所に「井上氏、井筒屋佐兵衛」とあり⁽³⁷⁾、彼が「井筒屋」という屋号を持っていた事が分かる。「井筒屋」は、含翠堂の「助力生員」でもあつた綿買問屋の井筒屋清右衛門をはじめ郷内にも複数あつたが、何れも関係性は分からない⁽³⁸⁾。享保期の平野郷では、綿業において繰屋（繰繰り）と買問屋（繰綿を諸國に販売）を仲介していた売問屋がその機能を失って没落するが⁽³⁹⁾、井筒屋佐兵衛が売問屋であつたという史料は見出せない。既述のように含翠堂の地代の支払先が明和四年（一七六七）以降井上家から井筒屋太右衛門に移っている事、あるいは正臣の没後その七回忌に際して血縁関係にあつた末吉家とともに井筒屋太右衛門が寄付を行っている事等から、この井筒屋太右衛門と同族であつた可能性もある⁽⁴⁰⁾。また享保九年（一七二四）に大坂で大火（妙知焼）が起きた際、五井持軒の子である五井蘭洲が病身の母とともに平野郷に避難したが、この母は「井筒屋佐平」といへる旅宿⁽⁴¹⁾で亡くなっている⁽⁴²⁾。この「井筒屋佐平」が井筒屋佐兵衛正臣の事であれば旅籠であつたとも思われるが⁽⁴²⁾、「井筒屋佐平」邸に止宿しただけでも考えられる⁽⁴³⁾。後述のように、この二年後、正臣と蘭洲は懷徳堂で講師として同僚となる。

（二）含翠堂の活動と正臣

含翠堂では、年少者への授業と成人への講義が行われていた。前者に関しては、含翠堂の「壁書」に「童子の位次、入学の先後に従ふべし」「童子稽古場の席、毎朝着到の遅速に従ふべし」等とあるが、「童子挨拶處々同輩なるべし」の箇所に「但七名家の子供は格別のこと」と付記がある。これは七名家の権威維持という含翠堂の性格と同時に、七名家以外の子供を受け入れていた事も示し

ている。授業では読み書きとともに儒学教育も行っていた⁽⁴⁴⁾。儒学教育の目的としては一面では七名家を敬う秩序の維持もあつたであろうが、友直が子供への教育によって「終に風俗をうつしかふ〔移し変う〕へし」と述べているように⁽⁴⁵⁾、合理的な儒学の普及をもつて社会改良に繋げるという意図もあつた。

一方の成人への講義では、参加者は七名家を中心とする有力者に限られていた。従つて教育としての機能のみならず、知識人の交流の場としても機能しており、含翠堂には著名な学者がしばしば訪れた。含翠堂創立の二年後、享保四年（一七一九）六月には後に懷徳堂の初代学主となる三宅石庵（萬年）が含翠堂で講義している。石庵は浅見綱齋の弟子であり、正徳三年（一七二二）には大坂で私塾多松堂を開いていた。「含翠堂」という名称は、当初井上邸にあつた老松から「老松堂」と名付けられていたのを、石庵が範質の詩の一節「遅々澗畔松鬱々含晩翠」から「含翠堂」と改めたという⁽⁴⁶⁾。また寛政十年（一七九八）に刊行された秋里籬島『撰津名所図会』には「於含翠堂東涯先生講筵」の図があるが、伊藤仁齋から堀川古義堂を受け継いだ伊藤東涯も享保十二年（一七二七）に含翠堂を訪れて講義している⁽⁴⁷⁾。この他に、三輪執齋（助力生員）、五井持軒（四書屋加助）、伊藤東所（東涯の子で古義堂を継ぐ）、三宅観瀾（石庵の弟で水戸彰考館総裁）、中井愁庵（第二代懷徳堂学主）、中井竹山（第四代懷徳堂学主）、中井履軒（第五代懷徳堂学主）らも含翠堂で教授した。

このような交流の背景には、古来平野郷が学問のみならず文化芸術においても盛んであつた事がある。天文年間（一五三二～一五五）には花人西坊唯心軒が出て『唯心軒花伝書』を残しており⁽⁴⁸⁾、茶人では成安家から平野道桂が出た。道桂は千利休の猶子であり、利休の後妻である宗恩は道桂の姉とされる。また、利休や織田有楽斎とも親しく金地院崇伝に参禅した東末吉家の太郎兵衛増重の母は堺の津田宗及の娘（あるいは姪）であり⁽⁴⁹⁾、小堀遠州の茶会にも末吉一族がしばしば同席している。しかし平野郷の文化活動として代表的なものは、連歌・俳諧等の文芸であつた。七名家を中心とする平野郷の文化人は、牡丹花肖伯、烏丸光広、松永貞徳、西山宗因、井原西鶴らと親しく交流した。末吉道節や土橋宗静、あるいは堺に移り住み寛文元年（一六六一）に俳諧集『埋草』を撰した成安法師らは特に有名である⁽⁵⁰⁾。このような文芸活動の中心となつたのは、平野郷社の連歌所であつた。土橋友直の子孫にあたる土橋知之進による『平野含翠堂概要』には、「平野庄連歌所ハ文禄年間の草創ニシテ、特ニ連歌田ナド迄モ設

ケラレタル程ニシテ、阪上・末吉・土橋・三上・成安・西村・井上・奥野・諸氏等当時ノ同志ナリキ」其最モ盛ナリシハ、元禄年間ヲ中心トナス」とある⁽⁵¹⁾。正臣も連歌をよくしたようで、西山宗因・宗春・昌察三代の発句集『西山三籟集』には、「文台開、井上正臣興行」として宗春の発句が載せられている⁽⁵²⁾。また既述の『等怡懷旧連歌三物写』からは、正徳三年（一七二三）、四年、五年の連歌会に正臣の出席が確認できる。享保七年（一七三二）には河瀬管雄を宗匠とする二百歌会、同九年には西山昌察を宗匠とする連歌会が催されており、正臣はいずれにも参加している。さらに西山宗春筆「八吟百韻連歌」にも、末吉宗律、末吉宗伴、土橋友直、土橋宗信、奥野良弘、中瀬常興とともに八吟の連衆に名を連ねている⁽⁵³⁾。末吉宗律は「井上佐兵衛女（妙吟）」が嫁いだ治兵衛宗勝の兄で、大蔵卿少納言伏原宣幸の娘を娶っている。末吉宗伴は宗勝の弟、土橋友直（土橋本家）と宗信（土橋別家）は含翠堂の「興立生員」、奥野良弘（清順）は平野薬で有名な産科医で「古今伝授」を受けた歌人でもあり、享保十六年の「奥野良弘発願長柄橋柱文台佳儀和歌三十一首」には六角堂池坊専純らが歌を寄せている。また中瀬氏（錢屋）は七名家外ながら江戸後期には惣年寄を出すようになる。このような七名家を中心とする高いレベルの文化サークルの発展について、土橋知之進は連歌所を中心に行われた「斯ル風流韻事ハ、ヤガテ平野含翠堂ヲ産ムノ遠因トナリシモ計ラレズ、含翠堂ニテ屢次〔たびたび〕歌会和歌・連歌・発句・狂歌ノ催アリキ」と指摘している⁽⁵⁴⁾。

教育の場、交流の場、文芸の場と並ぶ含翠堂の活動として付け加えなければならぬのは救恤活動である。三輪執齋「原野〔平野〕学問所之事」には、「七郎兵衛〔友直〕並井上作兵衛〔正臣〕と申者兩人申合せ、一郷の餓を救可申旨相談を定め施申候」とある⁽⁵⁵⁾。前述のように平野郷は多くの田畑を綿花栽培に割いていたが、綿作は稲作の三倍余の収益が期待できた一方で、肥料等の投資額も大きい上に天候に左右され易く、投機的な側面が強かった。また綿を売って米を買うという形になる為、元禄十三年（一七〇〇）および正徳四年（一七一四）に起きた米価高騰も危機意識の高まりを招いていた。そのような事から含翠堂では創立二年後の享保四年（一七一九）九月から「施工料集帳」を作成して用意銀を準備しており、正臣も出銀している。実際に享保十七年に西日本を襲つた飢饉では、郷内の大念仏寺において数千人に施しを行った。この活動を契機として、古河藩から毎年米一石分の代銀が含翠堂に給与される事となる。

既述のように享保十二年（一七二七）五月に含翠堂を訪れた伊藤東涯は、「井上氏を院長にさしおかるに、大坂に移住ゆへ、この館主に頼おかる」と記している。正臣は既にこの頃には大坂に移っており、含翠堂には後継の館主（沢田元立）が置かれていた事が分かる。正臣が大坂へ移ったのは、同地に開校した懷徳堂での教授の為であった。

三、大坂・京都の井上佐兵衛正臣

（一）懷徳堂の創設と正臣

懷徳堂は三宅石庵を初代学主として、三星屋武右衛門、舟橋屋四郎右衛門、備前屋吉兵衛、鴻池又四郎、道明寺屋吉左衛門の「五同志」によって創設された。前述のように、道明寺屋（富永芳春）が含翠堂の「助力生員」に名を連ね、あるいは三宅石庵が含翠堂で講義を行っており、さらには相互に寄付金のやり取りもあったように、懷徳堂と含翠堂は深い繋がりを持っていた。享保九年（一七三四）三月の大坂大火では、高麗橋に移転していた三宅石庵の多松堂も焼失してしまい、石庵は既述の五井蘭洲とともに平野郷に避難している。この避難中の八月に懷徳堂が落成し、石庵は大坂に戻った。

その二年後の享保十一年（一七二六）、上方に学問所を設けたいという將軍徳川吉宗の意向を受けた三輪執斎の周旋や石庵の弟子である中井斃庵（しやうあん）の奔走の結果、懷徳堂に官許が下り、三宅石庵を学主、中井斃庵を預人として大坂学問所としての活動が始まる。これを記念して同年十月五日には石庵によって『論語』と『孟子』の冒頭を解説する「論孟首章講義」が開講された。正臣は含翠堂「興立生員」である成安栄信、徳田宗雪らとともにこの講義を聴講しているが⁽⁵⁶⁾、既にこの時には正臣が懷徳堂の講師になる事が決まっていた。斃庵の子で第四代学主となる中井竹山が記した『懷徳堂内事記』には、「十月五日、老先生〔三宅石庵〕論語開講。是より日講相始まり、講師は並河五一郎殿、井上左平殿、蘭洲五井先生三人にて……」、また西村天因『懷徳堂考』年譜には、「十月五日学主石庵始めて経を講ず。以後並河誠所井上赤水五井蘭洲教授し、三輪執斎伊藤東涯も亦来講せり」とある（赤水は正臣の号）⁽⁵⁷⁾。しかし早くも享保十二年四月には並河誠所が去り、また石庵と確執のあった五井蘭洲も同じ頃に三輪執斎を頼って江戸に下った⁽⁵⁸⁾。同年の夏からは講義が得意でなかった石庵も日講に出たが翌春には止めてしまったので、その後は『懷徳堂考』に「井上左平一人となり

しをもて隔日の講と為し」とあるように、正臣が懷徳堂の講義を一人で背負う状況に陥り、日講も隔日となった。

懷徳堂に関しては多数の研究があるので割愛するが、講義内容については『懷徳堂内事記』に「日講の書は、四書・書経・詩経・春秋胡伝・小学・近思録等也」「毎月望〔十五日〕、同志会合、老先生〔石庵〕象山集要の講有之」と記されているように、石庵時代の懷徳堂の学問は所謂「外朱内王（表向きは朱子学、内向きには陽明学）」であった。正臣の学問的背景に関しては、「井上赤水は伊藤仁斎の門弟であり、主任的な講師としての役割を果たしたとみなされる」、あるいは「井上赤水と並河誠所は伊藤仁斎の歴史主義に傾倒しており」とされるが⁽⁵⁹⁾、この点では、仁斎に学んだものの「その旨予が心になはざるによつて其学を信ぜず」と述べていた含翠堂の同志土橋友直⁽⁶⁰⁾、また仁斎の古義学に批判的であった懷徳堂の同僚五井蘭洲と対照的である。正臣には『文識』という書物がある。伊予の士篤庵のために「論字」「論句」「論意」を書き与え、これを纏めて「文識」と名付けた。後に「附録」を追記したものに門弟の寺田毅斎が「諺解」を追加し、『文識附録諺解』として寛保三年（一七四三）六月に刊行されている。その内の「書生読書急務当務」において正臣は、仁斎と並んで陽明学者の中江藤樹や熊沢蕃山、あるいは山崎闇斎門下の朱子学者藤井懶斎（なんさい）の書物も勧めており、必ずしも古義学に固執していた訳ではない⁽⁶¹⁾。

また懷徳堂時代の正臣に関して、東海散人の『俯仰審問』という天文書に「嘗て並河市五郎ナルモノ浪花尼崎町臨徳堂ニテ天文ノ講釈ヲナセシ時ノ事」として次のような話がある。「譬（たと）ハバ天井ウラニ蠅ノトマリテ人ハ之ヲ倒ト見レトモ蠅ハソレヲ正ト信ズルニ同ジト言ヘ（バ）、一度（一同）其言ヲ歎美セシ時、井上左平ナル者現レテ、先生天上〔天井〕へ猫ヲハワセテ見給ヘト云ヘシニヨリ、並河氏大ニ赤面セリ」⁽⁶²⁾。「臨徳堂」は懷徳堂、「並河市五郎」は正臣とともに懷徳堂講師を務めた並河誠所（五郎）であろう。

（二）その後の正臣

享保十五年（一七三〇）、懷徳堂学主三宅石庵が死去し、預人であった中井斃庵が第二代学主を兼ねた。正臣はしばらくの間は斃庵を支えていたが、程なく京都に去っている⁽⁶³⁾。『懷徳堂内事記』には、「左平殿京都官遊に付」とだけある。「宦〔官〕遊」とは、「官命で」あるいは「官吏となって」赴く事を指すようだ

が、この時期の正臣の活動については不明である。「文讖」によると京都では「援卿散人」と称したという。伊藤東涯『初見帳』には、享保十六年九月八日「高三弥介、堺之人」の箇所に「井上左兵衛氏同道」とある。当時京都に居た正臣が、上洛した同郷の知人を古義堂の東涯に紹介したのであろう⁽⁶⁴⁾。高三弥介については詳しく分からないが、堺には小歌「隆達節」の創始者で秀吉に召されたという高三隆達が出た薬種商の高三家があるので、その一族と考えられる。

正臣は五年程京都で活動した後、享保二十年（一七三五）には故郷の堺に戻っている⁽⁶⁵⁾。この頃の平野郷では、同族と思われる井上次郎右衛門政親が含翠堂「肝煎」として毎年の寄付を継続しており⁽⁶⁶⁾、その後も井上佐兵衛正常、井上佐兵衛正幸といった正臣の後継者の活動が見られる⁽⁶⁷⁾。神光寺墓地には、「撰泉之界府井上正臣之三男」という秋月芝紅（井上佳臣）の墓があり、彼は親族である大坂の早川佳重の養子になったと記されている。この佳臣は元文元年（一七三〇）の生まれとなっているので、堺に戻ってからの子である。また「末吉家系図」に拠ると、正臣の娘（長佐）は、「井上佐兵衛女（妙吟）」が嫁いだ末吉治兵衛宗勝の息子である治兵衛宗政に嫁いでいる。二代に渡って東末吉の治兵衛家と姻戚関係を結んだ事になるが、宗勝と同じくこの末吉宗政もまた元文元年から平野郷町惣年寄を務めている。そのような縁もあって正臣はしばしば平野郷にも戻ったようで、「含翠堂什器目録（元文三年）に「四書大全、廿二冊」を「井上左平氏へかし、未五月十五日迄」とあるように⁽⁶⁸⁾、含翠堂から書物を借りている。学問とともに連歌も以前同様に楽しんだようで、元文二年の「平野庄権現宮連歌千句」、同四年および寛保元年（一七四一）の「奉納千句」連歌会等に参加し、元文五年（一七四〇）十月には、親族である末吉宗伴の「奉納独吟千句連歌」の跋文を記している。

また、元文二年（一七三七）七月に建てられた大和国葛城上郡名柄村（現奈良県御所市）の郷士高橋佐助宗倫の墓誌「慶軒翁墓誌銘」の末尾に、「前浪華府学講師井赤水退蔵正臣拜述」と刻まれている⁽⁶⁹⁾。「浪華府学」は懷徳堂の別名である。高橋佐助は吉野川分水に尽力した人物であるが、「末吉家系図」に末吉五郎兵衛綱利の妻が「大和名柄村郷侍高橋佐助女（由壽）」とあるように、彼もまた末吉家の親族であった⁽⁷⁰⁾。佐助の孫に当たる綱利の子善左衛門は旗本であった末吉孫左衛門嘉于家の養子に入った後、末吉撰津守利隆として長崎奉行にまで昇進しており、また彼は含翠堂に書籍を寄付している⁽⁷¹⁾。尤も、末吉家を介しての

血縁関係だけで正臣が高橋佐助の墓碑銘を記したとは考え難い。墓碑銘に「客居于京師遊歴于浪華宿儒先生群賢諸老無聞名不見之無見而不容焉」とあるように佐助は学問を好み京都や大坂でも学んだようなので、懷徳堂や含翠堂で正臣と知り合ったとも考えられる。同じ綿産地である葛城上郡と平野郷の関係は密接で、含翠堂「興立生員」の成安栄信も名柄村に隣接する増村において領主である旗本小堀家の代官を代々務めた中村家から平野郷の成安家に入った養子であった⁽⁷²⁾。そのような縁もあり、葛城上郡の有力者が平野郷を訪れる事も度々あったと思われる。

正臣は延享二年（一七四五）に死去した。翌年四月には土橋宗信によって平野郷社の神宮寺十二坊の一つ宝寿坊において正臣を追悼する連歌会が興行されている。また宝暦二年（一七五二）には「井上赤水七回忌」が行われており、末吉内と井筒屋太右衛門から寄付が為されている⁽⁷³⁾。

おわりに

今回の「研究ノート」では、断片的に残された井上佐兵衛正臣の行跡を総合する事を試みた。正臣の生年は不明であるが、出身は堺である。その後、平野郷惣年寄を務めた土橋一友や末吉宗勝と姻戚関係にあり七名家にも数えられる井上（佐兵衛）家を継いだ。井筒屋の屋号を持ち相当な財力があつたようだが、何らかの事情で正臣の代に逼塞する事になる。その故もあって含翠堂創立に際しては屋敷を提供し、自身も「院長」としての役割を果たすとともに講師としても活躍した。含翠堂創立から九年後、大坂の懷徳堂が官許を受けてからは懷徳堂に移り、講師として日講を担当した。懷徳堂での活動は四年程で、その後京都へ「宦遊」した。京都では五年程滞在したようだが、その間の活動は詳らかでない。その後、故郷の堺あるいは娘婿が惣年寄を務める平野郷に戻って学問や連歌を楽しんだ末、延享二年（一七四五）に没した。弟子には寺田毅齋あるいは和辰齋といった人物がいたようであり、名柄村の高橋佐助もその一人であろう。著書には『文讖』の他に『貽含翠社友書』など幾つか遺しているようであるが、現在ではほとんど確認できない⁽⁷⁴⁾。正臣の家業やその学問の位置付け、あるいは京都での活動等に関しては、今後の調査課題としたい。

- 註
- (1) 「正臣」の読みに関して、寛政年間に刊行された秋里籬島『撰津名所図会』には「まさとみ」と振り仮名がある。
- (2) 森繁夫（編）『名家伝記資料集成』第四卷（思文閣出版、一九八四年）、七九一頁。また、鎖平、退蔵、投轄齋、翠堂主人、懷徳舎人、援卿散人とも称した。
- (3) 長南倉之助『攝州平野の含翠堂』『歴史地理』第二六卷六号（一九一五年）、竹下喜久男「含翠堂設立の前提」『大谷女子短期大学紀要』第一二二号（一九六八年）、木村泉「含翠堂について」『日本史研究』第一一二号（一九七〇年）、梅溪昇・脇田修（編）『平野含翠堂史料』（清文堂出版、一九七三年）、津田秀夫『近世民衆教育運動の展開—含翠堂にみる郷学思想の本質—』（御茶の水書房、一九七八年）、含翠堂顕彰会（編）『含翠堂』（平野戸主会、一九八五年）、藤本篤「含翠堂創設者土橋友直の生没年等について」『大阪春秋』第四四号（一九八五年）、村田保「含翠堂堂主土橋友直」『大阪春秋』第七〇号（一九九三年）等。
- (4) 多賀博「懷徳堂と含翠堂」『日本美術工藝』第二〇一号（一九五五年）、三二頁。
- (5) 「元禄七年平野郷由緒書」（末吉文書）第六九冊九五頁。杉森玲子「近世初期の平野庄—年寄・庄屋の動向を中心に—」佐藤孝之（編）『末吉家史料の目録作成と公開および同家史料の総合的研究』（二〇〇二年）。
- (6) 「平野郷土橋家記録」内の坂上家「御親族方」には、「冷泉家、西三条家、藤谷家、倉橋家……」とある。『日本都市生活史料集成（十）在郷町篇』（学習研究社、一九七六年）、三二二頁。
- (7) もとは牛頭天王を祀っていたが、十四世紀前半に熊野三所権現を勧請して後は、熊野権現社とも呼ばれた。
- (8) 「宝永七年平野郷由緒書」（末吉文書）第二〇三冊六四頁。佐藤孝之「平野郷由緒書」の構造と性格『日本歴史』第六七三号（二〇〇四年）。平野郷はもと杭全庄と呼ばれていた。『大徳寺文書』等からは、十四世紀以降、平等院荘園内に大徳寺の塔頭如意庵が所有する土地が広がっていた事、またこの頃から平野庄と呼ばれていた事が分かる。
- (9) この二通の連判状は、脇田修「戦国末期、平野郷郷民の連判状」『日本史研究』第一二七号（一九七二年）に翻刻されている。
- (10) 「高台院御黒印状」（慶長十五年六月二十日）。「東末吉文書一」杉森「近世初期の平野庄」。
- (11) 「一五八四年の日本年報」『イエズス会日本年報（上）』（雄松堂書店、一九六九年）、三二四頁。
- (12) 平野区誌編集委員会（編）『平野区誌』（創元社、二〇〇五年）、一一〇～一二五頁。
- (13) 近世平野郷の政治体制としては、坂上氏を象徴的支配者とし、その下に平野郷町七町四村を治め平野郷社の神事も担当する「惣年寄」がいた（惣年寄が公式に置かれたのは宝永五年）。これは七名家から出るのが通例で、「坂上七番頭末裔惣年寄」を自認した。定員は五名とされるが二～八名の例もある。また、七町に「町年寄」、四村に「村年寄」が一区域につき一～六名、「惣年寄」の任免で置かれた（町・村年寄には七名家以外の者もいた）。尤も年寄と庄屋（久左衛門家、伊右衛門家）の抗争等もあり、近世前期の統治形態は流動的であった。出原真哉「平野郷惣年寄と坂上七名家」『歴史研究』第四三三号（二〇〇五年）、佐藤孝之「撰津国平野郷における惣年寄制への移行をめぐって」『東京大学史料編纂所研究紀要』第一三三号（二〇〇三年）。
- (14) しかしながら七名家の構成については、江戸時代末期まで平野郷の支配層として存続した末吉、土橋、辻葩、三上家の他は不定であり、徳成、黒瀬、西脇家等が数えられる事もあった。むしろ江戸期において明確に七家が挙げられる事はほとんどなく、「七名家筋」の中で有力な家が数えられたと思われる。正臣の井上家に関して見ると、『平野郷町誌』や『含翠堂考』平野戸主会『含翠堂』等では七名家の一と明記されるものの、代わりに黒瀬家が入る文献もある。井上家が七名家に数えられる場合は、必ず則光氏の系統である。坂上本家から最も早くに別れた系統で泥堂氏とも称したが、本家は永享年中に絶家した。
- (15) 竹下喜久男『近世の学びと遊び』（思文閣出版、二〇〇四年）、六三頁。
- (16) 伊藤東涯『初見帳』には、七名家の辻葩に「ツチガハナ」、興立生員の間「ヒマ」と付記されている。山根陸宏・岸本真実「古義堂文庫蔵伊藤東涯『初見帳』（四）『ピブリア・天理図書館報』第九四号（一九九〇年）、八三頁。
- (17) 大坂の陣に際しては、慶長十九年冬および二十年夏ともに徳川秀忠の本陣が置かれた。東末吉家が豊臣方、西末吉家が徳川方を支持するという各地で見られた策を取ったとされるが結果として双方ともに存続する事ができた。尤も実際には東末吉家は徳川方とも親しくしており、単純に東西に分

- (18) かれたとは言えない。中田易直「末吉孫左衛門と末吉平野一統」『日本歴史』第五〇一号(一九九〇年)、出原真哉「末吉文書の大坂の陣記と平野」『日本歴史』第六〇二号(一九九八年)。
- (19) 船数が七十艘になった寛永十七年当時の船持は三十七名で、柏原今橋、平野郷、大坂天満に船会所が設けられた。岡田光代・山下重雄「近世柏原船の船持について」『大阪府立大学経済研究』第五一卷三号(二〇〇五年)。
- (20) 元和元年、徳川家康は平野郷の町割と光源寺の復興を末吉孫左衛門吉安に命じた。杉森玲子「平野の町割と元禄七年「平野大絵図」」佐藤孝之(編)『末吉家史料の目録作成と公開および同家史料の総合的研究』。
- (21) 津田秀夫「後期封建社会に於ける平野郷町の人口の変遷」『ヒストリア』第二号(一九五二年)、一二二〜一二三頁。
- (22) 山口之夫「封建崩壊期における摂津平野郷の変質過程」『ヒストリア』第二〇号(一九五七年)。
- (23) 山口之夫「河内木綿と大和川」(清文堂、二〇〇七年)、六八頁。十八世紀後半には釜屋四郎兵衛、大黒屋八兵衛、淀屋三郎兵衛といった郷内の商家が絶えている。『平野郷町誌』、三〇一頁。尤も、平野郷の綿産業は江戸時代後期に再び隆盛する。
- (24) 山口之夫は、平野郷周辺で綿作が発展したのは慶長十七年から承応二年にかけてと推測している。山口『河内木綿と大和川』、八頁。
- (25) 桓武天皇が崩御した後、その後であった坂上春子が兄広野麿を頼って平野郷に移り、大同年間に長寶寺を開創した。その後、同寺は坂上家の女子が代々受け継ぐ尼寺となった。南北朝時代には、大覚寺統(南朝)の後醍醐天皇が坂上民部邸のあった長寶寺に一時滞在した。二十三日は、坂上田村麿の命日が五月二十三日である事に因む。
- (26) 「中臣祓」「三種之大祓」の伝授、および「四組木綿手織」の許状。
- (27) 土橋宗信「含翠堂記」『平野含翠堂史料』、三二六〜三二七頁。
- (28) 大阪青年塾堂(編)『含翠堂考』(一九四三年)、四九頁。
- (29) 「土橋氏家譜並系図」『含翠堂考』、六八頁。「宗静公聞書之内二」飯田正一「土橋宗静」『関西大学文学論集』第九卷三号(一九四一年)。
- (30) 『末吉家系図』は、出原真哉「末吉文書の研究—家系図の検討と末吉太郎兵衛増重」『歴史研究』第三三号(一九九五年)に拠る。
- (31) 伊藤東涯「含翠堂記」には、井上・土橋の「二子在邑為著姓」とある。『平野含翠堂史料』、三二一頁。
- (32) 土橋宗信「含翠堂記」『平野含翠堂史料』、三二六頁。
- (33) 執斎の十月十一日付の土橋友直、井上正臣、成安休弘宛書簡には「先以京師發足之節者遠境態々御上京御見立、殊ニ御銘々玉章且御 贖 被下之、不淺過分之至、不識所謝候」とある。また享保三年の執斎五十歳の賀においても、執斎は「大阪平野の学友も亦多く歌有けり」と記している。『執斎和歌集(執斎全書第十二編)』(点林堂、一九二七年)、六二一、七一〜七二七頁。
- (34) 「含翠堂手簿」『平野含翠堂史料』、一〜一六二頁。このような掛銀は享保十七年まで続き、その運用によって含翠堂の経営を支えた。
- (35) 神光寺の山門脇には「懷徳書院学主三宅万年、同春楼、同創立同志中村良斉、長崎黙淵、含翠堂創学者土橋誠齋、井上赤水墓所」と刻まれた石碑がある。神光寺墓地には他に井上正義(了庵)、井上常庵、井上鶴野らの墓もあるが、正臣との関係は不明。秋月芝紅(井上佳臣)の墓については後述する。
- (36) 津田「近世民衆教育運動の展開」、一五七頁。
- (37) 櫻井武次郎「平野連歌作者名目」『等怡懷旧連歌三物写』から「『大阪俳文学研究会会報』第二六号(一九九二年)、三二頁。
- (38) 明和二年の質屋関連史料に「井筒屋佐兵衛」の名がある。「大阪平野郷質屋仲間記録3・平野郷質中間退人数之分銀子配分請取証文帳」(日本経済史資料画像データベース)。
- (39) 山口「河内木綿と大和川」、六四〜八二頁。高尾一彦「攝津平野郷に於ける綿作の発展」『史料』第三四卷一・二合併号(一九五一年)。
- (40) 正臣没年の延享二年、「井筒屋以休百箇日」として含翠堂から井筒屋太右衛門に香典が渡されている。
- (41) 西村天因「懷徳堂考附懷徳堂年譜」(懷徳堂記念会、一九二五年)、一五頁。
- (42) 宝永二年の段階で平野郷には十一軒の旅籠屋があった。杉森「平野の町割と元禄七年「平野大絵図」」。
- (43) 三輪執斎「原野学問所之事」に、含翠堂(井上邸)では「客杯には臥具(寝

- (44) 梅溪昇『大坂学問史の周辺』(思文閣出版、一九九一年、四三〇〜四三二頁。
 (45) 土橋友直「本朝学校記」『平野含翠堂史料』、三二二〜三二五頁。
 (46) この改名が何時の事であったのかは定かでないが、少なくとも享保五年には「含翠堂」と呼ばれている。
 (47) 伊藤東涯は享保十八年五月にも含翠堂を訪れている。
 (48) 「唯心軒花伝書」『図説いけばな体系』第六卷(角川書店、一九七二年)、七九頁。
 (49) 出原「末吉文書の研究」、九二〜九三頁。
 (50) 七名家の成安家出身で「成安」を俳号とした。叔父の子で茶人であった成安慶順を頼って堺の正法寺に隠居した(筆屋であったとも言う)。「誹家大系図」では「泉国の魁首」と評されている。田中義真「西鶴と堺」『堺女子短期大学紀要』第一九号(一九八四年)。
 (51) 元禄十年に刊行された土橋宗静『柴屋寺奉納発句』には、井上久左衛門(有絶)の名がある。正臣との関係は不明だが、元禄七年に市町の町年寄であった久左衛門(杉森「平野の町割と元禄七年」『平野大絵図』)、あるいは同じ井筒屋であれば元禄九年十二月付「乍恐以書付奉願上候(平野庄にて新銭鑄造許可願書)」(末吉文書「第三〇冊三八頁)の差出人である井筒屋久左衛門あたりと同一人物であるとも考えられる。
 (52) 『西山宗因全集』第一卷(八木書店、二〇〇四年)、一四頁。
 (53) 時期は不明だが、西山宗春が享保八年に没しているものでそれ以前である。
 (54) 土橋知之進『平野含翠堂概要』(稿本)津田「近世民衆教育運動の展開」、一一七頁。
 (55) 『土橋宗静日記』によると、既に延宝二年に救恤活動が為されている。津田「近世民衆教育運動の展開」、八九頁。
 (56) 「萬年先生論孟首章講義」末尾「享保十一年丙午冬十月五日癸亥浪華学問所懷徳堂開講生徒」西村時彦(編)『懷徳堂五種』(松村文海堂、一九二一年)。
 (57) 『懷徳堂内事記』(Web懷徳堂・学校記録類運営関係資料)、西村時彦「懷徳堂考」(懷徳堂記念会、一九二五年)。
 (58) 蘭洲の東行を享保十四年とする史料もある。
 (59) テツオ・ナジタ(子安宣邦訳)『懷徳堂—十八世紀日本の「徳」の諸相』(岩波書店、一九九二年)、一三六、一六五頁。
 (60) 「友直書留」『平野区誌』、一八四頁。
 (61) 中野「葭の根屑—その二」『混沌』第四号、二四〜二七頁。
 (62) 佐藤政次『曆学史大全』(駿河台出版社、一九七七年)、八〇五頁。
 (63) 享保十五年一月に「井筒屋佐兵衛」が平野川沿いの居宅を買い上げたという史料がある。「大阪の部落史(二)史料編近世2」(二〇〇六年)、三〇三頁。
 (64) 山根陸宏・岸本真実「古義堂文庫蔵伊藤東涯『初見帳』(五)」「ピブリア・天理図書館報」第九五号(一九九〇年)、二六七頁。
 (65) 中野「葭の根屑—その二」『混沌』第四号、二四〜二七頁。
 (66) 伊藤東涯が享保十二年に含翠堂を訪れた際に井上次郎右衛門と会っているので、正臣が大坂に去った頃から含翠堂と関わっていたと思われる。中村幸彦「伊藤東涯来簡集抄(附初度含翠堂行、入攝志)」『ピブリア・天理図書館報』第二号(一九九九年)。含翠堂への寄付は、享保十九年から延享三年までは井上次郎右衛門、寛延元年から同四年までは井上免次郎、明和三年から安永二年までは井上佐兵衛が行っている。「含翠堂手簿」『平野含翠堂史料』、一〜一六二頁。
 (67) 『含翠堂普請勘定目録』。津田「近世民衆教育運動の展開」、一六六、二四〇頁。井上(佐兵衛)家はその後も平野郷で存続し含翠堂とも関与し続けたが、十八世紀後半あたりから含翠堂との関わりも途切れたようで、天保元年(一八三〇)の含翠堂の大普請では「明らかに井上家の居住部分と思われる部分が取り除かれている」。島岡成治「近世教育施設の場所論的研究—含翠堂と懷徳堂」『日本建築学会九州支部研究報告』第三七号(一九九八年)、三七七頁。
 (68) 埜上衛「江戸時代の塾などの図書館」『日本文化史論叢—柴田實先生古稀記念』(一九七六年)、七〇一頁。
 (69) 御所市史編纂委員会(編)『御所市史』(一九六五年)、一八六〜一八八頁。
 (70) 「末吉文書」第二〇六〜二〇九冊には、河内や大和における水論関係の史料が数多くある。末吉家と大和国の関係は深く、天正七年には吉野山に一万本の桜を植樹している。
 (71) 「什器目録」『平野含翠堂史料』、二二二〜二二六頁。

- (72) また名柄村の市田家は慶長年間に平野郷の末吉家から養子を貰った際に末吉と改姓し、明治に至るまで代々同村の庄屋を務めた。上田秋成はその親族である。長島弘明『秋成研究』（東京大学出版、二〇〇〇年）。
- (73) 津田『近世民衆教育運動の展開』、一五七頁。
- (74) 中野「葭の根層—その二」『混沌』第四号、二四〇—二七頁。